

# ICT と文学研究：電子テキスト時代の読みと翻訳

マルチヌ・カルトン

水野雅司

## 0. はじめに

翻訳という行為は、原文の正確な理解から出発し、それを別の言語の同じ意味の表現に移し換える行為であり、その意味できわめて制約された活動である。しかし、実際に翻訳されたテキストがとる形は多様である。その多様性の背後には、翻訳者個人の経験や理論に基づく方法論の違いがあることは言うまでもないが、より本質的な問題として、一つの言語の中のある表現が、必ずしも別の言語の中にその「等価物」を持っているわけではないという問題がある。その意味で、翻訳という行為は、二つの言語、二つの文化の間にある差違を乗り越えようとする、すぐれて創造的な営みでもある。

本稿では、情報通信技術、いわゆる ICT (Information and Communications Technology) を活用した文学研究の試みの一環として、文学作品とその翻訳について計量的な視点から考察する。そして、そのような計量的な特徴から出発して、個々の翻訳テキストが「制約」と「創造」のはざまで、どのような表現手段を用いて原文の「等価物」を生み出そうとしているかを示し、また同時に計量分析などの ICT を用いた分析が作品の読みを深め、作品の解釈の水準でも翻訳という行為を支援するものであることを示したい。

第1節では、分析の対象である Maurice Leblanc の *L'Aiguille creuse* とその翻訳テキストの紹介、および計量的分析のための準備作業に関する説明を行う。第2節では、実際に ICT を用いた比較・分析を通して、翻訳テキストの計量的な特徴を示し、翻訳テキスト相互にどのような文体的違いがあるかを考察する。第3節では、原作の主題論的な特徴と思われる要素を取り上げ、それが実際に

有意な特徴であるかどうかを ICT を活用して検証し、作品の鍵概念に関する翻訳上の問題について論ずる。最後に、Nathalie Sarraute の *Enfance* に関する Michel Bernard の語彙測定 (lexicométrie) に基づくテキスト分析の試みを紹介し、電子テキスト時代における読みと翻訳との関係についても展望を述べたい。

## 1. 翻訳テキストの選択と分析のための予備的作業

### 1.1. *L'Aiguille creuse* とその翻訳

Maurice Leblanc の *L'Aiguille creuse* は、1908 年 11 月から翌年 5 月にかけて Lafitte 社の月刊誌 *Je sais tout* に連載小説として発表され、1909 年 6 月に同社から単行本として刊行された。日本では 1912 年に『大宝窟王』のタイトルで三津木春影による翻案の出版を嚆矢として、以来約一世紀にわたり、数十に上る翻訳・翻案が発表されている<sup>1</sup>。翻訳者の中には、菊池寛といった人気作家や、堀口大學のような著名な文学者も名を連ねており、最近でもなお新たな翻訳・翻案が出版され続けていて、この作品が長期間にわたり根強い人気を維持し続けていることを物語っている。

本稿では、数多い日本語訳の中から三つの翻訳テキストを取り上げる。まず、「奇巖城」というゴシック小説風のタイトルを初めて用いることでこの作品の日本語題を確立し、シリーズ全作品を翻訳し「ルパン全集」として刊行して日本におけるルパン作品の歴史を決定づけたと言っていい保篠龍緒の『奇巖城』（1918 年）<sup>2</sup>。次に、訳詩集『月下の一群』によって日本の近代詩に大きな影響を与えた堀口大學による『奇岩城』（1956 年）<sup>3</sup>。そして現在のところ最新の翻訳であり、主に現代フランスの推理小説の翻訳を手がける平岡敦による『奇岩城』（2006 年）<sup>4</sup>である。

この三つを取り上げたのは、第一にこれらはすべてフランス語原典から作品全体を訳出しており、原文に沿った厳密な比較・分析が可能だからである。例

1 長谷部史親『欧米推理小説翻訳史』、双葉社、2007 年、156-169 頁。

2 モーリス・ルブラン「奇巖城」、『アルセーヌ・ルパン』、講談社、《スーパerver文庫》、1987 年、183-273 頁。

3 『奇岩城』、新潮社、《新潮文庫》、1968 年。

4 『奇岩城』、早川書房、《ハヤカワ文庫》、2006 年。

えば、先に挙げた三津木春影の翻訳などは、英訳版をもとにしており、当時の翻案によくあるように登場人物の名前まで日本風に改められている。また、菊池寛の訳は、分量も大幅に縮小され、内容を要約したリライトに近い。一方、今回取り上げる日本語訳のうち最も初期のものである保篠龍緒の訳は、Lupin を「ルパン」というように、原音との多少のずれはあるものの、登場人物名や地名などの固有名詞をできるだけ忠実に表記し、また後述するいくつかの点を除きほぼ完全にフランス語原文に対応しており、最初の本格的な日本語訳であるといえることができる。

第二に、これら三つの翻訳は、最初期の本格的な翻訳である保篠訳、次に戦後の復興期、同作品の新訳が立て続けに刊行された時期に出された堀口訳、そして 2000 年代の平岡訳というように、それぞれ大正 7 年、昭和 31 年、平成 18 年と出版された時代が大きく隔たっており、比較することによって単に個人の資質や方法論による差違のみならずそれぞれの時代の日本語の傾向も浮かび上がってくると考えられるからである。

## 1.2. 比較・分析のための準備

現在ではすでに多くの文学作品が電子データベース化され、文学研究においても必要不可欠なリソースとなりつつある。*L'Aiguille creuse* も例外ではなく、多数の文学作品の電子テキストを無償で提供している Ebook libre & gratuit<sup>5</sup>というインターネット上のサイトから入手することができる。フランス語原文の分析には同サイトからダウンロードした Microsoft Office Word 形式のファイルをプレーンテキスト形式に変換したものを用いた。一方、日本語訳については、電子化されているのは菊池寛のもののみであり<sup>6</sup>、本稿で扱う三つの翻訳テキストについては、まず本文の電子化から始める必要があった<sup>7</sup>。

最終的にわれわれが用いたのは、フランス語原文と三つの日本語訳の、プレー

5 <http://www.ebooksg gratuits.com/> では多くの文学作品が pdf や html など複数の形式で提供されている。なお、本稿において示した url はすべて 2011 年 9 月現在のものである。

6 菊池寛『奇巖城』、青空文庫、<http://www.aozora.gr.jp/>。

7 具体的な作業としては書籍をスキャナーで読み込み、OCR ソフトを用いてテキスト化した上で、数回にわたって変換ミスなどのチェックを行うという手順が必要であり、時間的にも労力的にもかなりの負担を伴う。学生アルバイトの献身的な協力がなければ、準備作業はさらに困難なものとなったであろう。

んなテキストファイルである。原文と翻訳テキストの比較には mkAlign というパリ第3大学で開発されたウィンドウ上で動作するプログラム<sup>8</sup>を使用した。このプログラムは、フランス語原文とその訳文を対訳形式で左右に表示したり、テキスト内の任意の単語や表現をグラフや地図形式で表示したりする機能を持ち、対になった二つのテキストの比較・分析を支援するものである。またテキストの編集機能もあり、電子化されたテキストのより詳細な確認・修正作業の一部はこのプログラム上で行った。

mkAlign は、二つのテキスト一起点テキスト (texte-source) と目標テキスト (texte-cible) 一をそれぞれ指定して読み込ませることで動作するが、左右の対照ウィンドウ内に表示する単位を適切に定義してやる必要がある。文単位で表示することも可能であるが、仏日の翻訳においては通常必ずしも文という単位が厳格に守られるわけではないので、今回は段落単位で比較することにし、準備したブレーンテキストにエディタを用いてそのための修正を加えた<sup>9</sup>。mkAlign は同時に二つのテキストしか扱うことができないので、三つの日本語訳を原文と比較する場合、準備作業は目標テキストの数だけ繰り返す必要がある。図1はmkAlignにテキストを読み込ませたところである。

---

8 <http://www.tal.univ-paris3.fr/mkAlign/>。使用したのは version 2.00.

9 具体的には、各段落の最後に「#」を加え、それを分析単位を示すセパレータとしてプログラムに登録する作業である。作業には NTEmacs というエディタを用いた。オープンソースのエディタ GNU Emacs の一種でウィンドウ上で動作し、通常の編集作業だけでなく、内蔵されたプログラミング言語を用いてテキストの整形なども行うことができる。<http://www.gnu.org/software/emacs/>.

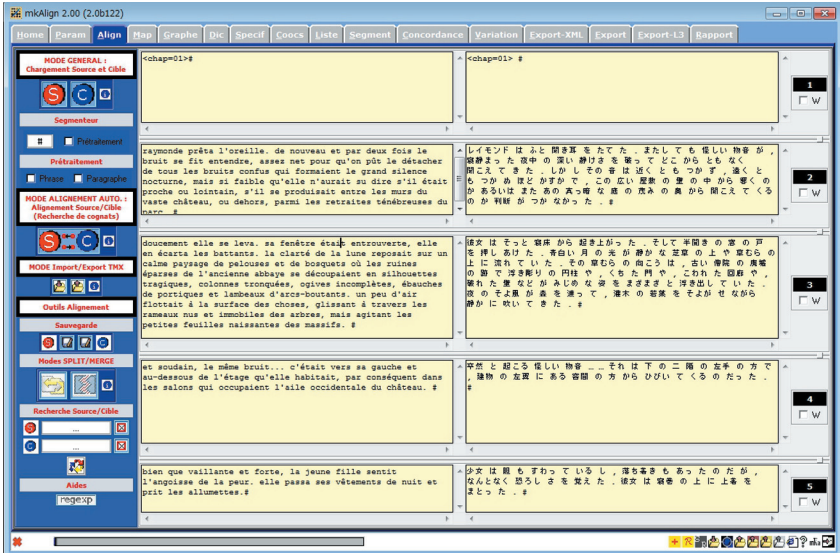


図 1：mkAlign の表示画面の一つ

これは作品の冒頭箇所であるが、読み込んだテキストは最終的に 2212 の段落を比較の単位として持つことになった。mkAlign では、このように左右に対訳形式でテキストを表示し、対応箇所を見比べながら読み進むことができる。また、使用語彙を頻度順に表示したり、任意の語が使われている箇所を空間的に把握できるように地図状のグラフで表示したりすることができ、テキストの特徴を視覚的に把握しやすくする機能も備えている。さらに、読み込んだテキストを XML や HTML 形式で出力する機能も持っているので、出力された対訳形式のテキストをブラウザや表計算ソフトなどを用いてより手軽に表示・編集することも可能である。

今回の分析の作業では、原文と三つの訳文とを同時に比較するため、mkAlign で段落ごとの対応を確認・修正した後に、4 つのテキストを加工して表計算ソフトで一覧表示できるようにした。図 2 は、表計算ソフト OpenOfficeCalc で表示したところである。

	A	B	C	D
1	Maurice Leblanc	Hoshino Tatsuo	Horiguchi Daigaku	Hiraoka Atsushi
2	Chapitre 1			
3	raymonde prêtta l'oreille, de nouveau et par deux fois le bruit se fit entendre, assez net pour qu'on pût le détacher de tous les bruits confus qui formaient le grand silence nocturne, mais si faible qu'elle n'aurait su dire s'il était proche ou lointain, s'il se produisait entre les murs du vaste château, ou dehors, parmi les retraites ténébreuses du parc.	レイモンドは 又と聞き耳をたてた。またしても 広い 物音が 遠隔まった 夜中の 深い 静けさ を 破って 聞こえたと なに 聞かえてきた。しかし その 音は 近くともつかず、遠くともつかぬ ほどかすかたで、この広い 庭敷の 壁の 中から の かきこえは またあの 裏通り 風の 音の 奥から 聞かえてくるのか 判断がつか なかった。	レイモンドが 聞き耳を立てた。またしても、し かも二度まで、その 物音が 聞かえてきた。夜 の 深い 静寂を 作停つ いてもささやかな 閑静な 中にい 物音から 区別し の できるほどの、かすかに はきこえているが、それが 広いのか、遠いのか、この 広い 庭敷の 壁の 内側から 聞かえて くるのか、それとも 庭敷の 影の 奥の 奥の方から 聞かえてくるかは 意いかなる ほどかすかた。	レイモンドは 耳をすました。やっぱり 聞かえる。今度は、二度 続けて、夜中の 静寂に 紛れた かすかに 響く音と は 遠く、はるか 遠くとした 物音だった。けれども 音は ほとんど 聞こえず、 遠いのか、遠いのかは 判断としない、広い 庭敷の なから 聞かえるのか、暗い 庭の も ののかから 響くのか ともわからなかった。
4	doucement elle se leva, sa fenêtre était entrouverte, elle en écarta les battants, la clarté de la lune reposait sur un calme paysage de pelouses et de bosquets où les ruines éparées de l'ancienne abbaye se découpaient en silhouettes tragiques, colonnes tronquées, ogives incomplètes, ébauches de portiques et lambeaux d'arcs-boutants, un peu d'air flottait à la surface des choses, glissant à travers les rameaux nus et immobiles des arbres, mais agitant les petites feuilles naissantes des massifs.	彼女は そっと 座敷から 起き上がった。そして 半開の 窓の 戸を 押開、あいた 黄色い 月の 光が 静かな 芝草の上や 草むらの上 に 流れて いた。その 草むらの 向こうは、古い 僧院の 庭敷 地の 奥で 浮彫りの 円柱や、くたれた 門やに 残 された 回廊や、破れた 柱など かみかみ とな び まさまさと 浮き出ていた。夜、その 風が 森を 漂って、灌木の 葉葉を そよがせながら 静かに 吹いてきた。	そっと 彼女は 起きあがった。部屋 の 窓は 半開 になっていた。彼女は 扉を 押開、月光、 芝生と 木立かなんかの 緑の 奥の上 に 安らいでいた。そこには 昔の 修道院の 庭敷 が、折れた 円柱や 半壊の アーチや 回廊の 残 骸や、ぼろぼろの 遺構など かつらな 遺構印 な 形跡を見せつけていた。あるかないかの そよ風 薄らした アーチ、柱廊の 跡、壁の 残骸 が、物体の 表面を 流れたら 樹木 の あらで 示 されたに いただい そよ風は、葉の 薄らした 小枝の 葉の 表面を 滑らして いたが、下草の 葉葉だけを そよがせていた。	レイモンドは そっと 起きあがり、半開に なった 窓をいかに かにあけた。月光が、 芝生や 樹立込みの 広がる 静かな 庭を 照ら している。その ところどころに、庭敷 となった 古い 建物の もの 影が ぼんやり 影が 浮かんで いた。そよ風の 穴けた 円柱、かみかみ 破れ たる 柱廊の 跡、壁の 残骸、 葉の 薄らした 小枝の 葉の 表面に 吹き送る、草むらの 小さな 葉葉を そよがした。
5	et soudain, le même bruit, c'était vers sa gauche et au-dessous de l'étage qu'elle habitait, par conséquent dans les salons qui occupaient l'aile occidentale du château.	突然と 起る 怪しい 物音……それは 下の 二階の 左手の方で、建物 の 左翼にある 客間 の 方から 吹いてくる の たった。	ここ でふとまた、あの 同じ 物音が 聞かえてきた。……それは 左手か、彼女が 住む 三階の 下の あたひから 聞かえてきた、つまりそれは 庭敷の 西側の 広間室の あたひから だ。	突然、またあの 音がした。左手、下の 階の あたひだ。ということは、庭敷の 西翼にある 居間から だろう。
6	bien que vaillante et forte, la jeune fille sentit l'angoisse de la peur, elle passa ses vêtements de nuit et prit les allumettes.	少女は 胆も ずわって いるし、薄ら 響きも あった のだが、なんと ぞとぞ 恐ろしき 夜は、 寝巻の上 に 上着を まとった。	気丈な しっかり者では あったが、さすがに この 狭い 部屋は、恐怖の 脚聲を 響かした。彼女が 部屋着を 脱ぎ、 マチを 取りあげた。	強い 女にしては、気丈な ほうだとは いえ、 狭い 部屋に 居る 彼女が 恐ろしく なった。ナイト カウンを おり、 マチを つかむ。
7	raymonde... raymonde...	「レイモンド、レイモンド！」	「レイモンド……レイモンド……」	「レイモンド、ねえ、レイモンド……」

図2：OpenOfficeCalc でフランス語原文と日本語訳を一覧表示したところ

こうした一覧表による比較の利点は、具体的な表現や言い回しの比較以前に、テキスト相互の形式的な違いを視覚的に分かりやすく提示してくれる点である。たとえば、翻訳テキスト間の分量の差や空欄の存在などは一目で把握でき、そうした表面的な差違に基づいてテキストにアプローチすることで、それぞれのテキストのより詳細な特徴を確認することができる。実際、この最初の視覚的な調査は予想していた以上の分析の材料を提供してくれた。

## 2. ICT による比較・分析の実際

### 2.1. 一覧表による原文との比較

一覧表による比較から、まず保篠訳の段落数が原文より 87 少ないことが確認できた。段落が欠落している箇所を調べてみると、そこにはいくつかの水準の異なる理由があることも分かった。保篠は、登場人物の会話を短縮する傾向があり、例えば、図 3 では原文の Sholmès の科白（一覧表の段落番号 1694、1696 および 1698）に対応する三つの段落が一つの段落（段落番号 1694）にまとめられており、段落 1695 および 1697 の Beautrelet の科白は削除されていることが分かる。このように保篠訳では、短い返事や相槌などは省略され、ひとつ

図 3：保篠訳における科白の圧縮

原文では、6つのパラグラフにわたり計1233語を費やして語られている部分が、保篠訳ではただ以下のように要約されている。

— 23 —



紳士、巨盗ルパンの眼に歓喜の涙が光った。

[illegible]

図4：保篠訳における表現の改変

ほぼ厳密に文単位で訳されている平岡訳（右端）では文字数にして713字費やされている場面が、保篠訳ではそのほぼ4分の1の179字に縮約されている。これが保篠自身の意図によるのか出版社の意向かは不明であるが、この場面に描かれた、フランス的な愛情の告白、特に「ほら、見たまえ、あの歩き方。ほんの少し、腰をふって。あれを見るといつも、ぞくっと体が震えるんだ……いや、彼女の何もかもが、愛と感動でわたしを震わせる。」（平岡訳）といった描写が、当時の社会通念に反するという判断、とりわけ探偵小説の読者として想定される青少年に対する「教育的配慮」が働き、この極めて大胆とも言える改変を行わせたであろうことは容易に想像できる<sup>10</sup>。

このように、一覧表を用いた比較は、本来であれば、紙の本による手間のかかる対照作業によらなければ発見できないようなテキストの特徴を可視化して

10 同様の改変は、より新しい時代の少年少女向け翻訳、例えば、南洋一郎訳（1958年）や江口清沢（1973年）、小泉夏樹訳（1991年）においても確認できる。南洋一郎訳『奇巖城』、ポプラ社、2005年。江口清沢『奇巖城』、集英社文庫、1992年。小泉夏樹訳『奇岩城』、講談社、1991年。



くれる。相違がどこにあるか分からない場合でも、原文との不一致が一覧表上で視覚的に把握できるのである。

こうした読みを進めていくと、さらに別の水準での違いも浮かび上がってくる。それは、堀口訳に関するものであり、mkAlign による段落の対応の確認作業を通じて見えてきたものである。堀口訳にもまた原文との奇妙な不一致が数多く存在し、保篠訳以上に多くの空欄を挿入しなければならないだけでなく、原文に対応しない訳文が多数見られた。こうした不一致は、保篠訳のような理由によっては説明できないものであり、一見するとかなり恣意的な改変が加えられているように思われた。実際、*L'Aiguille creuse* の日本語訳には縮約版やリライティングも多く存在し、こうした欠落の理由にもわかにははかりがたい。もしこれが翻訳者による恣意的な翻案ではないとすれば、考えられるのは保篠訳が依拠している版とは別の版の存在である。堀口訳『奇岩城』には原典に関する記載はなく、国立情報学研究所が提供するデータベース検索サイト Nacsis Webcat などによる検索からもそれらしい情報を入手することはできなかった。

われわれは参考のために電子化してあった他のいくつかの日本語訳との比較も試みた。その結果、石川湧訳、水谷準訳および曾根元吉訳が、堀口訳とまったく同じ特徴を示していた<sup>11</sup>。これらは、昭和 30 年代の、戦後のルパンものの翻訳「ブーム」の際に相次いで刊行されたものであるが、当時の、特に大衆向けの小説には原典の正確な情報が記載されていないことが多く、これらも例外ではなかった。フランス国会図書館で当時の *L'Aiguille creuse* の出版の状況について調べたところ、1950 年に Hachette 社の *l'Énigme* 叢書から出された版<sup>12</sup>があり、1932 年の Lafitte 社の版<sup>13</sup>をもとにいくつかの部分が削除された版であることが分かった。そしてこの版は 1950 年と 1953 年の 2 回しか発行されておらず、昭和 30 年代に相次いで刊行された日本語訳はこの版を用いたものであることが分かった。原書の版の調査を目的としたものではないわれわれの

11 石川湧訳『奇岩城』、創元社推理文庫、1965 年。水谷準訳『奇岩城』、角川文庫、1960 年。曾根元吉『奇岩城』、中央公論社、1962 年。

12 Maurice Leblan, *L'Aiguille creuse*, Éditions Hachette, coll. « l'Énigme », 1950.

13 Maurice Leblan, *L'Aiguille creuse*, Éditions Pierre Lafitte, coll. « le Point d'interrogation », 1932.

研究において、こうした文献学的な発見は、電子テキストを用いた比較がもたらしたいわば意図せざる副産物に過ぎないが、異なる版の存在自体が大きな発見であった。

一方、2006 年に出版された平岡訳『奇岩城』は、保篠訳と同じ 1909 年版を用いており、mkAlign を用いた比較でも異同のないことが確認できた。段落の構成についても改変と呼べるのは一箇所のみ、それもごくわずかな変更であり、原文の構成にきわめて忠実な翻訳であると言える。

	A	B	C	D
	le choc part d'autant plus effroyable qu'il fut silencieux; presque également longtemps les deux ennemis se mesurèrent du regard, une haine égale courait leurs visages, ils ne bougeaient pas.	怪人と巨人、それが激突しだにけり。然しうしろと潜みながらくちあらく相打ちの情態も、その角にもありありと現れてゐた。	この衝突はそれが沈黙の間にはほとんど無音で許された。ほとんどの静寂さで行なわれた。しかし、それだけに鬼気の手合いは長々と睨み合つた。同じをわめいた。立ちまゝ動こうとした。	そこは静かではとんとおごそかな感じがする。ところが、それだけにいったん身動きもまた出来ぬ。ただ、こちらにも長い間、睨み合ひつづけてゐる。手助けがいて、人の顔を引寄せたりして、身をよこし、身なりをつしなへてゐる。
277	l'hipn prononça avec un calme terrifiant :	ルパンは恐ろしいほど平静に口を開く。	ルパンが不気味に落着ききはらって口を切った。	やがてルパンが口をひらいた。恐ろしいほど静かな声だった。
278	- ordonne à tes hommes de laisser cette femme.	「その婦人の解放を命じろ。」	「その女を放せと部下に命令しろ！」	「その女を放すよう、部下に言え！」
279	- non !	「ならん。」	「いやだ！」	「だめだ！」
280	ou en eût pu croire que l'un et l'autre s'en redoutaient d'engager la lutte suprême et que l'un et l'autre se ramassaient toutes leurs forces, et plus de paroles unites celle fois, plus de provocations offensives. le silence, un silence de mort.	彼ら二人は互いに大闘争の幕を起したことを怖れた。二人は互いにより多くの戦力の集中しようとする。今度は双方とも半分の賢慧もやべらない。一歩背の振り言葉もしゃべらない。沈黙だ。	彼らはお互いに最後の決闘開始を怖れる。お互いの力差を野手にしているから。そして、そのためここでは見えない言葉も確実なしに両方とも忘れられた。死の沈黙だった。	まるでルパンもホームズもまた最後の決戦に身を投じた。だが、全力を集中させているかのうしろのほうは、むしろ赤い言葉はひびく。ひとことも発せずなまねなしに両方容貌もなしに沈黙。死の沈黙が続く。
281	griffe d'angoisse, raymonde attendant l'issue du duel, beatrictis lui avait saisi le bras et la maintenant immobile, au bout d'un instant, hipn répéta :	レイモンドは狂わんばかりに心配して決闘を観望し、ポーリスは彼女を驚く押さえて、つかまへた。ルパンはまた繰り返した。	レイモンドが陰険に気触れしそうになって。この決闘の結果が彼女の腕を握んだ。そして動かしなかつた。しばらく時を待たずにルパンが繰り返した。	レイモンドは息苦しいほどの不安にかかれながら、決闘のポーリスは彼女の腕をつかみ、動かすまいとした。しばらく待つた。またもルパンは口を開いた。
282	- ordonne à tes hommes de laisser cette femme.	「その婦人の解放を命じろ。」	「その女を放せと部下に命令しろ！」	「女を放すよう、言うんだ！」
283	- non !	「ならんッ。」	「いやだ！」	「だめだ！」
284	l'hipn prononça :	ルパンはなお。	ルパンが一語言った。	
285	- écoute, shomés...	「なあ、聞け、ホームズ……」	「聞いてくれ、ホームズ……」	「よく聞けよ、ホームズ……」
286	mais s'il interrompit, comprenant la stupidité des mots : en face de ce colosse d'orgueil et de volonté qui s'appelait shomés, que signifiaient les menaces ?	といいかけて、それも無益にとつくんで、大それた巨人の非礼にたいして諷刺と意志の威嚇が役に立つ？	だが彼はそれぎり黙って立った。言葉の無力さに気づいて、自分の心と野望の境目を失った。何かに対してのおどろきの瞬間にかへ何の意図もあらうぞ。	そう言うにかけて、ルパンは言葉を切った。これこそ無駄だった。わかっていてたぶんホームズの前に、自分より先に何を意味するかあらうぞ。
287	décide à tout, bouquement il porta la main à la poche de son veston. l'anglais le prévint, et bondissant vers sa prisonnière, il lui colla le canon de son revolver à la gorge, comme de son temps.	こうなったら百年目と、彼は突然ポケットのピストルを手を握る。それより早くホームズは、「囚人、我々がここに置上ることにしたらしく銃口をさしつけろ。」	突然、決闘の場を固めた彼が肩袋のポケットへ手を差し入れ、イギリス人が祖先を割って縛られていた。老女に向かい、向かい合った。モーター車の中へ入った。	こうなったらしかたない。ルパンはいきなり上層のポークスを手に受け入れた。そのウエッジに飛びかかり、右のかみのわきにさかへてゆく。
288				

図5：平岡訳の欠落

以上のように、mkAlign を利用して作成した一覧表による比較作業を通して、各翻訳テキストの特徴や時代的差違のいくつかが浮かび上がってくる。こ

うした手段の利点は、「しばしばただ一つの翻訳テキストのみに絞られてしまう翻訳の批評」<sup>14</sup>を複数のテキストへと手軽に向かわせてくれる点にある。さらに複数の翻訳テキストを並置することによって、翻訳テキスト同士を同時に比較・分析できる点も大きなメリットである。Berman の言うように「一つの翻訳とその翻訳者に関する分析は、他の翻訳を検討することなしには困難である」<sup>15</sup>からであり、こうした一覧性あるいは横断性は、ICT が提供する強力な読みの手段のひとつである<sup>16</sup>。

## 2.2. 形態素解析プログラムを用いた翻訳テキストの比較

一覧表を利用した比較に加え、われわれはさらに Cordial Analyseur と Mecab というプログラムを使用して、テキストの計量的な比較・分析を行った。Cordial Analyseur は、Synapse Développement 社が開発したフランス語テキストの統計的分析を行うソフトで、総語数、頻度、使用率などの語彙情報を得たり、あらかじめ登録された膨大な数の言語データベースに基づいてテキストの統計的な特徴を調べたりすることができる<sup>17</sup>。また MeCab は、京都大学情報科学研究科と NTT コミュニケーション科学基礎研究所の共同研究プロジェクトを通じて開発された形態素解析のためのプログラムで、日本語の文章を単語ごとに区切る「分かち書き」や単語の品詞情報の抽出などを行うものである<sup>18</sup>。また MeCab が抽出するデータの集計にはオープンソースの統計解析システム R<sup>19</sup>を、そして MeCab を R から使用するために RMeCab<sup>20</sup>を用いた。これらの

14 Catherine Bocquet, « *Don Juan* en France ou l'apport didactique de la critique des traductions », dans *Traductologie et enseignement de la traduction à l'université*, Études réunies par Michel Ballard, Arras: Artois Presse Université, 2009, p.185.

15 Antoine Berman, *La traduction et la lettre ou l'auberge du lointain*, Paris: Seuil, 1999, pp.83-84.

16 ICT を活用した「横断的読み」の有用性については、カルトン、水野「文学作品の読解と情報通信技術」『言語・文化・社会』第9号、学習院大学外国語教育研究センター、2011年、pp.67-87を参照のこと。

17 [http://www.synapse-fr.com/Cordial\\_Analyseur/Preseintion\\_Cordial\\_Analyseur.htm](http://www.synapse-fr.com/Cordial_Analyseur/Preseintion_Cordial_Analyseur.htm). 用いたのは version 14.0 である。

18 <http://mecab.sourceforge.net/> より入手可能。用いたのは、version 0.98。MeCab 用の辞書として IPA 辞書 (ipadic-2.7.0) を用いた。<http://mecab.sourceforge.net/src>。また、日本語テキストデータの解析については、金明哲『テキストデータの統計科学入門』、岩波書店、2009年および石田基広『テキストマイニング入門』、森北出版株式会社、2008年を参照した。

19 <http://www.r-project.org/> を参照。用いたのは version 2.10.1.

20 <http://groups.google.co.jp/group/rmecab> を参照。RMeCab の version は 0.91.

プログラムを用いてフランス語原文と日本語訳の基本的な語彙情報を抽出し、実際に比較・分析するに当たっては、ソートや集計などを柔軟に行うためにデータを表計算ソフトで読み込んだ。

まずわれわれが注目したのは、各テキストの語彙に関する基本的な数値である。それぞれのテキストの総語数、名詞の総数、人称代名詞の総数を上記のプログラムを使って取り出し、さらに日本語訳については自立語の総数も調べた(表1)。

	Leblanc	保篠訳	堀口訳	平岡訳
総語数	63 840	85 703	88 374	79 460
自立語		40316 (47.0%)	40 848 (46.2%)	38 350 (48.2%)
名詞	14 704 (23.0%)	21 848 (25.4%)	22 091 (24.9%)	21 334 (26.8%)
人称代名詞	9117 (14.2%)	1 620 (1.8%)	2 108 (2.3%)	813 (1.0%)

表1：各テキストの語彙の比較

数値はすべて延べ数であり、カッコ内はそれぞれのテキストの総語数に対する割合を示したものである。フランス語と日本語では品詞体系も異なり、そもそも語という単位自体、日本語の場合フランス語ほど明確ではない。したがって、フランス語原文の数値はあくまでも参考の値である。また、MeCabで解析した名詞には、形容動詞の語幹やサ変接続の動詞語幹も含まれており、通常のいわゆる学校文法の品詞分類とは異なる。例えば、フランス語の動詞 *manger* を「食べる」とするか「食事する」あるいは「食事をする」と訳すかで、全体の語数も、品詞ごとの語数も簡単に変わってしまうので、両言語を直接比較することには意味がない。また、MeCabには人称代名詞という区分があるわけではなく、代名詞として集計されたものの中からフランス語の人称代名詞に対応する語を手作業で抽出したものであり、名詞の総数からは除いてある。日本語訳の集計の中に自立語という項目を設けたのは、助詞や助動詞のような機能

語と名詞や動詞のような意味的内容をより多く担う要素を区別して比較することで、それが文体の特徴となりうるかどうかを見るためである。

この結果でまず目を引くのは、三つの翻訳テキストの間の総語数の違いである。とりわけ堀口訳は、参照している原典が1909年版よりも若干短いにも関わらず、保篠訳よりも2000語以上、平岡訳と比較すると実に9000語近く多くなっている。自立語に注目すると、使用語数の順位は同じであるが、総語数に対する使用率でみると順位は逆転し、平岡訳の自立語の使用率がもっとも高くなる。ここから堀口訳の文体的特徴として、総語数が多いだけでなく、いわゆる助詞や助動詞などの付属語の使用率が高いことがあげられる。自立語が示す基幹的な意味を補う付加的な情報が多いという点で、堀口訳がより細かなニュアンスを示す要素を多用していることが予想できる。名詞のみに限ってみても、自立語の場合と同じ特徴が観察できるが、人称代名詞に目を移してみると、今度は使用語数、使用率ともに堀口訳が圧倒的に高いことが分かる。

この点をより詳しくみるために、自立語内における名詞と代名詞の使用率に注目する（表2）。

	保篠訳	堀口訳	平岡訳
自立語	40 316	40 848	38 350
名詞	21 848 (54.1%)	22 091 (54.0%)	21 334 (55.6%)
人称代名詞	1 620 (4.0%)	2 108 (5.1%)	813 (2.1%)

表2：自立語内における名詞と代名詞の数と使用率

この表から分かるように、自立語に対する名詞の使用率の差は、堀口訳と保篠訳では0.1%とごくわずかであるが、堀口訳と平岡訳では1.6%とやや広がっている。しかし人称代名詞の使用率を見ると、そこには著しい差が存在していることが分かる。

堀口訳が5.1%と最も高い割合を示しているとともに、名詞の使用率ではほ

とんど差のなかった保篠訳との差がここで再び開いている点は、両者の文体の違いを示唆していて興味深い。ちなみに動詞、副詞、形容詞の使用率について見ても、これほどの差は存在しない<sup>21</sup>。また、計量分析において語彙の豊富さを示す指標として用いられる TTR (Type-Token Ratio) を比較しても三者に大きな差は存在しなかった<sup>22</sup>。このように人称代名詞の使用率に関する三者の違いははっきりとしているが、特に平岡訳における人称代名詞の使用率の低さは際立っている。

実際、最も新しい訳である平岡訳は、主観的な印象としても非常に読みやすい訳文であるが、訳文自体の詳細な検討を行う以前に、すでにこうしたごく基本的な数値を見ただけでも、そこに大きな文体的特徴があることが理解できる。一般論として、フランス語では、文の主語は常に明示する必要があり、そのため既出名詞の反復を避けるために日本語に比べて人称代名詞の数が多くなる。そのことは表1に示したフランス語原文の総語数に対する人称代名詞の使用率14.2%という数値と日本語訳の数値（いずれも3%未満）の差とも一致する。しかし、その上でなお、平岡訳の数値は際立っており、この訳者における人称代名詞の抑制は、きわめて意識的・戦略的な選択であると推測できる。

次に実際の使用例を、先述した一覧表の形式で確認してみたい。例えば、次のような部分には、三者の翻訳上の戦略あるいは方法論の違いがよく現れている（表3）。

21 三つの日本語訳の動詞、副詞、形容詞について総数と自立語における使用率を示すと、動詞については保篠訳12966 (15.0%)、堀口訳13246 (14.9%)、平岡訳12695 (15.9%)、副詞については保篠訳2759 (3.2%)、堀口訳2333 (2.6%)、平岡訳2519 (3.1%)、形容詞は保篠訳1123 (2.7%)、堀口訳1070 (2.6%)、平岡訳989 (2.5%)であり、使用率の差はすべて1%以内に収まっている。

22 TTR は、テキストの延べ語数  $N$  に対する異なり語数  $V$  の比率であり、 $TTR=V/N$  で示される。実際の数値は、保篠訳 0.079、堀口訳 0.076、平岡訳 0.077 であった。



	保篠訳	堀口訳	平岡訳
Ces demoiselles ont rêvé ?	二人の娘が夢でも見たんでしょうか？	娘たちが夢でも見たとおっしゃりたいのでしょうか？	夢でも見ていたと？
je serais tenté de le croire, car, depuis ce matin, je m'épuise en recherches et en suppositions."	私もそう思いまして、今朝からいろいろと調べてみたり、捜して見ているんですが、	実はわしも そうだと信じたいくらいのもですよ、なにしろ今朝からわたしは探し回ったり、あれではないか、これではないかと思ひめぐらして見たりで、へとへとですかね。	わたしだって、できればそう思いたいところですよ。今朝からずっとあちこち調べたり、頭をひねったりでもうくたくたなんです。
Mais il est aisé de les interroger.	しかしとにかく二人を呼んで尋ねて見るのがいちばん早道です	でも一応あの娘たちに尋ねて見られたらどうでしょう、造作もないことですから	ともかく、娘たちに聞いてみるのが早いでしょう

表 3

表 1 で示した三者のあいだの使用語数の差が、視覚的にもすぐに把握できる。堀口訳がすべての段落で最も分量が多いが、さらに詳細に観察すると、堀口訳では、原文が指し示している状況や文脈などを、言葉を付け加えることでより具体化し、理解しやすくしていることが分かる。堀口訳の「とおっしゃりたいのでしょうか？」や「実は」、「一応」といった表現は逐語的な翻訳ではなく、文脈から読み取ることのできるニュアンスを訳者が付け加えたものである。また、原文の en recherche et en supposition という部分についても、三者とも品詞を転換させて訳しているが、堀口訳では「探し回ったり、あれではないか、これではないかと思ひめぐらして見たり」ときわめて具体的な思考の動きとし

て訳出している。また「探し回る」、「思いめぐらす」という複合動詞の使用や、文末での「が」、「から」、「からね」といった語の使用も特徴的である。そしてこうした翻訳の方法が、自立語の数だけでなく付属語の数を増加させるであろうことも容易に想像がつく。

一方、平岡訳は、人称代名詞の反復を抑制し、表現の簡潔さを選ぶことで、原文に忠実でありながらも意味を犠牲にすることなく自然で分かりやすい日本語を目指しているように見える。例えば、最初の文の主語 *ces demoiselles* が省略されている代わりに、最後の文の代名詞 *les* を「娘たち」と訳すというように、一連の流れの中で、必要な情報の提示をコントロールしている。また、堀口訳に比べて文の長さは短いとはいえ、品詞の転換や擬態語の効果的な使用といった日本語らしい言い回しの選択などは堀口訳と大きく異なっているわけではない。

#### 2.4. 第一人称代名詞のヴァリエーション

次に、三者の違いをさらに詳細に検討するために、用いられている人称代名詞の種類について比較してみたい。ここではその違いが最もはっきりと表れている第一人称単数のみを取り上げる。フランス語の第一人称代名詞 *je* および *me*、*moi*、*mon*、*le mien* などに対応する語としてどのような語が用いられているかを、MeCab および R を用いて作成した一覧から抽出したのが表4である<sup>23</sup>。数値は出現回数である。

<sup>23</sup> 但し、この表は、フランス語の第一人称代名詞の日本語訳をすべてを網羅するものではない。例えば、「己」や「自分」といった語も第一人称を示しうるが、他の人称でも用いられるためリストからは除外してある。

		保篠訳	堀口訳	平岡訳
1	私	184	43	1
2	わたし	7	31	193
3	わたくし	0	9	0
4	あたし	1	0	0
5	僕	184	204	2
6	ぼく	2	2	99
7	俺	96	0	0
8	おれ	5	0	11
9	われ	2	0	2
10	わし	6	351	2
11	小生	4	0	0
12	余	33	16	0
13	吾輩	1	0	0
14	朕	2	3	0
		528	659	310

表 4

まず、使用されている総語数を比較すると、予想通り、堀口訳が 659 と最も多く、平岡訳がその半分以下の 310 と最も少ない。三者の順位・比率とも人称代名詞全体の使用率の差を反映したものとなっているが、今度は保篠訳に際立った特徴が見て取れる。それは一人称を示す語の種類が格段に多いという点である。漢字と平仮名の表記をそれぞれ別に数えると、保篠訳 13 種類、堀口訳 8 種類、平岡訳 6 種類であり、同じ読みのものをまとめてもそれぞれ 10 種類、6 種類、5 種類と保篠訳の多様さは抜き出ている。保篠訳の特徴として出現頻度は低いものの「小生」「吾輩」といった語が用いられており、翻訳がなされた当時の日本語の時代性を感じさせる。そして保篠訳の種類の豊富さは、当時の日本語において、こうした語が、フランス語における *je* とは異なり、話者の地位や身分（「吾輩」、「余」）、あるいは発話の状況（「小生」）を示す社会的な記号

としての役割を担っていたことを示している。そして、フランスを舞台とした翻訳小説であってもごく自然にそうした使い分けがなされていたという点は現在から見るときわめて興味深い。また、「朕」という語も保篠訳と堀口訳双方に見られ、「朕は国家なり (L'État, c'est moi)」という科白を言いはなった当人であるルイ 14 世の一人称として用いられている。

このようにフランス語の第一人称代名詞に対応する語は、日本語においてはより積極的な意味を担っており、そうした人称代名詞の生かし方が、三者において大きく異なっていることが分かる。実際、平岡訳が意識的に人称代名詞の使用を制限し、その反復を避け、すっきりとした文体を目指しているとすれば、社会的な地位や年齢などを示す指標としての一人称代名詞の役割は相対的に小さくなることは避けられない。また逆に、そうした役割を人称代名詞に積極的に背負わせることで、その使用率が高くなるとも言えるわけである。堀口訳における「僕」と「わし」の使い分けは、まさにそのような例と考えられ、使用回数もそれぞれ 204 と 351 で突出している。実際、堀口訳では、少年探偵ポートルレを示す「僕」とこの少年を取り囲む年長の登場人物たちの「わし」は年齢を示す指標としてはっきりとした対照をなしている。

このように人称代名詞の使用率を、そのヴァリエーションまで含めて比較してみるとで分かるのは、それぞれの訳者がみずからの理解した物語世界をどのように再現しているか、語の意味だけでなく語の使用法まで含めた言葉の多様な水準でどのようにその世界を自国語の中に再創造しているかという点に関する、それぞれの訳者の言葉に対する態度の違いであると言えることができる。

### 3. 電子テキスト時代の解釈と翻訳

ここまでいくつかの基本的な量的指標に基づいてテキストの比較を行ってきたが、それが量というパラメータに依存している限り、作品の理解の質を保証してくれるものではない。文学作品の分析は、「読む」という具体的な行為・経験に依存しており、作品の〈意味〉や〈主題〉といったより繊細な問題については、より「人間的な」読み、言い換えれば、量ではなく「質的」なアプローチが必要であるように思われる。この節では、一見して量的な分析になじまな

いこうした読みの質的問題に対する計量的なアプローチの有効性について考察する。

### 3.1. être là：量的分析と質的読み

*L'Aiguille creuse* はいわゆる推理小説（roman policier）であるが、その主人公であるルパンには際立った特徴がある。それは、彼が変装の名人であり、人目を欺く天才であるということからくる特徴である。彼は常に追跡者の手から逃れ去り、いるはずのところにその姿はなく、しかし別人となって思わぬところに潜み、必要な場合にはいついかなるところにも忽然と姿を現す。ルパンは言わば「遍在」しているのである。こうしたルパンの神出鬼没な特性は、「人間的な」読みにおいては自明な事柄であるが、語彙の計量的な分析において機械的にそうした事柄を示す特徴を抽出することはできない。にもかかわらず「人間的な」読みは、こうしたルパンの存在を強調する表現として *il est là* という形式が何度か繰り返されていることに気づくことができる。こうした発見は直感的なものであり、あらかじめそれを発見するためのロジックや手段は存在しない。しかしひと度こうした点に気づいてしまえば、後はその仮説を確認するだけであり、この確認作業において ICT を用いることは非常に効率的である。Cordial Analyseur には、複数の語を同時に含む文あるいは段落を抽出する機能があり、これを用いると、être と là という二つの見出し語を同時に含んだ文の一覧を簡単に出力することができる。もちろん動詞 être がどのような法・時制に置かれていても構わない。

$$x^{\alpha}t_1 - t_1t_2 = \frac{m^2}{2} \left( \frac{1}{x^{\alpha}t_1} - \frac{1}{t_1t_2} \right)$$

段落の一覧 (一部)

われている文脈を調べてみると、ルパンを直接示す語 (Valméros)、あるいは彼の表現であった。Beautrelet、頻繁に登場する主要人物にうきわめて平凡な事態を示用されているという事実は、là という動詞表現は、数の。 « être là » は、変幻自在 (être-là) -- を象徴する

日本語において取る形式は  
れているとしても、日本語  
公の「遍在性」を象徴する  
性を弱めてしまっているこ



とは否めない。もちろんこれは翻訳の善し悪しの問題ではなく、言語的な差違に関わるものであり、簡単に乗り越えられる障壁ではない。être という動詞は、現代日本語では「いる」とも「ある」とも訳され、多くの場合主語が生物か無生物かであるかによって使い分けられる。実際の訳文では、保篠訳では、主語「死骸」(son cadavre) に対して「ある」、「あった」と訳され、同じ主語に対して堀口訳ではより説明的に「見いだされた」と訳されている。また、là という副詞も、日本語の「ここ」「そこ」「あそこ」すべてに対応する語であり、日本語テキストの表現の一貫性を損なう原因となっている。

こうした言語的な性質の違いのため、「il est là」というきわめて単純な事象を示す表現は日本語では様々な形を取り、それがキーワードとして機能することを妨げてしまう。しかしまた、こうした原文の特徴を把握することによって、もとの表現が果たしている役割に代わりうる手段を探ることも可能になる。その意味では、計量的な測定に基づいたテキストの分析は、翻訳においても強力な補助となりうる。例えば、平岡訳では、フランス語の表現の一貫性に代わって、「いますとも」や「絶対にいますよ」といった強調表現、また「ほらそこに…」といった黙説法的な表現、あるいは「忍びより」といった迂言法的な表現が使われており、全体として「いる/いない」の対立が弱められることで、その遍在性を暗示している。こうした方向性をさらに意識的・戦略的に推し進めることで、「être là」という形式の日本語における「等価物」を、いわば主題論的な水準で創り出す可能性も見えてくるように思われる。

### 3.2. *Enfance* における非個性的語彙と翻訳

« être là »という表現について見たように、もしわれわれの読みが正しいとすれば、語レベル、文レベルでの訳の妥当性とは別に、作品全体の構造の中で意味を持つ要素に関する翻訳の問題が存在し、そこには読み手＝訳者による作品の解釈という水準が関わってくる。そして、こうした解釈の質に少なからぬ影響を与えるのが、電子テキストによって可能となる読みの技術である。

Michel Bernard は、Nathalie Sarraute の作品の語彙を統計的な方法に基づいて 20 世紀後半に書かれた 225 点に上る文学作品と比較し、Sarraute の作品の

特徴についてきわめて興味深い指摘をしている<sup>24</sup>。Bernard が分析対象とした Sarraute の4つの作品<sup>25</sup>においてもっとも使用頻度の高い語は chose、père、air であるが、これらは一般的な著作物でも高い頻度で用いられている語であり、それだけでは Sarraute 作品固有の特徴を示す語とは言えない。しかし、文学作品のみを含むコーパスとの統計的な比較を行ってみると、Sarraute の作品に有意に多く使用されているのは est、elle、Véra (人名)、ce といった語であることが分かる。特に être の三人称単数現在形である est は「サロートの語彙的な特殊性を示す形式」であり、同様に sais、sens、sait といった現在形の動詞や、air、sensation などのごく普通の名詞の使用頻度も高い。さらに Sarraute の場合、他の作家に多く見られるような個性的な語 -- 例えば Marguerite Yourcenar における nymphe (「ニンフ」) など -- は少なく、むしろ tout、quelque、chose など不定の観念と関連づけられる語、petit や peu などの緩和、mais、ne、rien、pas などの逆接や否定、あるいは ce、c'、ça、là、ces、cette、maintenant といった指示の観念を示す語が、統計的に Sarraute の作品を特徴づけるものであることが分かるという。

こうした語は、通常よく使用される語であるだけに、それが Sarraute の言語の特徴であることに気づくことは難しい。それを知るためには、それらが他の膨大な文学作品の中で実際に使われている頻度を調べてみる必要があり、その作業はコンピュータの使用を前提としなければ実質的に不可能である。そして、すでに見たように、こうした特徴は不定、緩和、否定、指示といった作品の言語の「質的な」特徴を示す要素であり、この作家が *Enfance* のような、言語から逃れ去る曖昧な感覚や遠い過去の記憶の中に埋もれている捉えがたい感情を主題とした作品を書いていることとも符合する。つまり、こうした量的な特徴は、Sarraute という作家の文学的な姿勢と緊密に結びついたものであり、言葉の用い方という水準での反映として捉えることができる<sup>26</sup>。

24 « "Mes mots à moi" : aperçus lexicométriques sur l'oeuvre de Nathalie Sarraute », in *Nathalie Sarraute. Du tropisme à la phrase*, Presses Universitaires de Lyon, 2003, pp. 59-69.

25 *L'Ère du soupçon* (1956), *Le Planétarium* (1959), *Pour un Oui ou pour un Non* (1982) および *Enfance* (1983)。

26 例えば、こうした特徴は、Sarraute 作品において、より具体的には、言い直し、ためらい、撤回、留保という形で現れている。

Michel Bernard が提示している計量的な分析、より厳密には「語彙測定」(lexicométrie) による分析がもたらすのはまさにこうした知識であり、作品の読みに新たな次元を導入するものである。とはいえ、それは文学作品の本質を数字に還元してしまうものでもなければ、作品の特徴を自動的に抽出してくれるものでない。むしろ、直感的な気づきや仮説を確認するための手段として優れているのであり、これまで物理的な制限によって困難だった作業を可能にし、読みの質を深めるものである。実際、データの分析や選択においても「解釈」という作業が介在しており、生のデータそのものが作品の読みを決定するわけではない。Sarraute の作品の場合、なぜそのような非個性的な語が作品の特徴となりうるのか、それが作品の主題に関与する重要な特徴であるかどうかを判断しうるのは、やはり作品の具体的な読み以外にはないのである。

#### 4. おわりに

われわれが試みた計量的な分析は、そのような意味で具体的な読みを補助し豊かにするものであり、とりわけ「人間的な」読みが陥りやすい内容の直線的な理解を一旦括弧に入れ、作品の語彙的特徴や形式的要素へと目を向けさせ、作品の理解を別の角度からさらに深めるものであると言える。それはテーマ批評やナラトロジーのような文学理論が、それ以前には捉えることのできなかった新しい文学的事実を発見させてくれるのと同様の意味で、作品を読むための新たな手段となりうる。

計量分析的手法や語彙測定といった手段に基づく電子テキスト時代の読みは、今まで常に目の前に存在しながら把握することができなかった事柄を可視化してくれるという意味で、直線的読みを脱線させ、直感的読みを補完し、計量・測定という手段によって読みの感受性を鋭敏にするものであり、いわば顕微鏡や赤外線カメラのような人間の感覚を拡張する装置のようなものである。それは異なる言語で書かれたテキストの理解を助け、目標言語における起点言語の「等価物」の創造に新たな可能性を開くものである。

(附記：本稿は、学習院大学外国語教育研究センター 2009 年度研究プロジェクト「計量分析的手法を用いた翻訳テキストの研究」および同 2010 年度研究プロジェクト「テキスト計量分析の仏日翻訳への適用の研究」の成果に基づくものである。)

# TICE et la recherche littéraire : lecture et traduction à l'ère du numérique

CARTON Martine

MIZUNO Masashi

Les outils informatiques peuvent servir à la lecture et à l'analyse littéraires, mais aussi à la traduction littéraire. Plusieurs outils informatiques ont été utilisés pour comparer le roman français, *L'Aiguille creuse*, avec trois de ses traductions japonaises, faites par Hoshino Tatsuo, Horiguchi Daigaku et Hiraoka Atsushi.

La visualisation de l'alignement de l'original et de ses traductions obtenue grâce au programme d'alignement de textes, *mkAlign*, montre rapidement les différences entre les traductions. Hoshino adapte sa traduction à la culture de son public japonais. Quant à Horiguchi, l'analyse de sa traduction a révélé qu'il avait traduit une version différente de celle traduite par les deux autres traducteurs. Par ailleurs, l'analyse lexicométrique des textes japonais effectuée avec des programmes comme *MeCab*, *R* et *Rmecab* donne quelques données statistiques qui montrent les différentes stratégies utilisées par les trois traducteurs.

L'approche lexicométrique ouvre de nouvelles perspectives d'analyse thématique du texte littéraire, comme le montre un article consacré à l'analyse du vocabulaire du roman *Enfance* de Nathalie Sarraute. Cette approche lexicométrique appliquée au vocabulaire de *L'Aiguille creuse* a montré, entre autres, que l'expression « être là » était statistiquement liée au héros du roman, Arsène Lupin. Les résultats d'une telle analyse pourraient aider les traducteurs à pointer certaines expressions saillantes du texte et à en rechercher une

traduction adéquate dans la langue cible.

L'approche informatique des textes offre de nouvelles possibilités de lecture et d'analyse des œuvres littéraires, qui peuvent également servir au travail de traduction. Elle permet de repérer certaines caractéristiques du texte littéraire, difficilement visibles à la simple lecture.